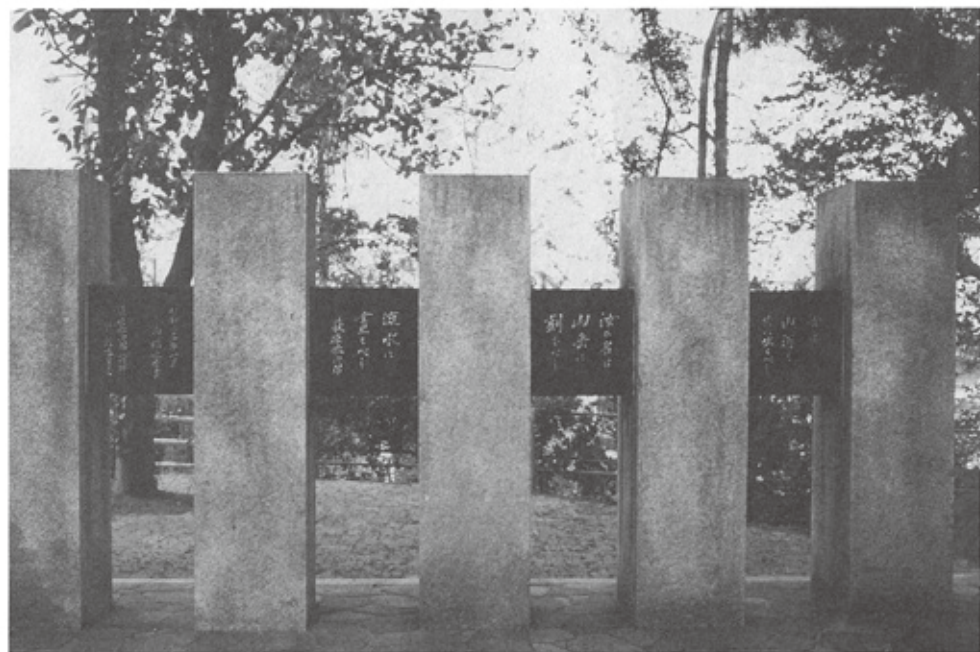


前橋文学館報

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち

No.12 1999.9



「脳の中の美術館」(要約)

布施英利

平成11年6月26日(土)、第56回アート・ステージで、作家・美術評論家の布施英利さんに「脳の中の美術館」について講演いただきました。以下はその要約です。

「ここ十年ぐらい脳に対する関心が高まっておりまして。脳科学という脳を研究する学問が進んできて、非常に面白くなっています。かつて文学が探究してきた「私とは何か」という一大テーマが、「私」という意識イコール「脳」というわけで、今はもしかしらば、脳科学や脳の研究によって引き継いで展開されて行くのではないかと考えられています。」

《UFOは脳の中にある》

四月に、NHK教育テレビの取材で、アメリカ、カナダに行つて、「UFOに遭つた」とか「宇宙人に誘拐された」という人に話を聞いて来ました。

宇宙人に誘拐されたというベティー・ヒルというおばあさんに会つて話を聞くと、「私はその時こういう色の洋服を着ていて」とか「こんな所に連れて行かれて、それがどんな部屋で」とか、「一生懸命話してくれました。それはどう見ても嘘をついているように思えないものでした。」

実際に彼女が体験したことは違うのです。三、四十歳のころ旦那さんとカナダにドライブに行き、帰る途中、高速道路を走っていた。夜、後ろから光が迫りかけて来ている



●ふせ ひでと

美術評論家・作家。1960年群馬県多野郡鬼石町生まれ。東京芸術大学美術学部卒業。同大学院博士課程修了。東京大学医学部助手として、養老孟司・東大教授(当時)のもとで研究・教育の職についた後、1995年作家として独立。専念。美術評論から科学エッセイ、小説まで幅広いテーマに取り組み。著書に『脳の中の美術館』『死体を探せ!』『理科系の脳みそ』『純文学殺人事件』など。

ような気がして、「何か怖いなあ」と言いながら走つていった。すると、前方に懐中電灯を振る人がいたので、ブレーキをかけた。そして気がついたら家に帰つていた。実はそれだけなんです。本人も宇宙人に遭つたとか、誘拐されたとか、空飛ぶ円盤を見たとか、その時は思つてなかつたのです。

ところが問題はそれから三年後です。旦那さんが少し精神状態が不安定になったので、精神科医に診てもらつた。その時彼女も一緒に催眠術をかけてもらつたのですが、そこで医師が「三年前にあつた夜の出来事についてもっと細かく話さないか」と言つた。そして二人とも突然ペラペラと「私たちは宇宙人に遭つて」「誘拐されて」ということを言い始めたのです。

もともと何にもないのですが、三年経つてよく思い返したら、宇宙人に遭つたみたいなのを言い出して、それを聞いた人から伝わつてどんどん話が大きくなってUFOに発展して行つたということなのです。

ではなぜそれがUFOに発展して来るかということなんです。僕は、本人さえもたまたまうな不思議なメカニズムが脳にあるのではないかと考え、いろんな現代脳科学で明かされている脳の仕組みと、ベティー・ヒルさんの言動を併せて考えました。

最近の心理学の研究で「偽りの記憶」というのがあります。例えば、ワシントン大学の心理学の先生がある実験をしました。学生十人に偽りの記憶を植えつけるために、催眠術をかけながら「あなたは子どもの時に自分の家の近くのショッピングモールで迷子になりました。」と、何度も何度も言つたのです。一週間とか半年経つて、十人中かなりの学生が「そういえば自分は子どもの時ショッピングモールで迷子になったなあ」と言い始めたというのです。

体験しなかつたことが、もうあたかも自分が体験したかのように、しかもすごく細かい話がどんどん後からつけ加えられて生まれて来るのです。「偽りの記憶」はおそらく人間誰でもあるのではないかと言われているのです。人間は記憶ですべてが成り立っているけれども、実はその記憶は簡単に変えることができるという、不思議な仕組みがあるのです。

脳の中で真横にある側頭葉が記憶に関係しているのですが、それに関連して、カナダに行つて、ある脳科学者の実験の現場を見て来ました。

頭に磁石のついたコイルみたいなのをかぶせて回転させ、側頭葉に磁力を与えたのですが、実験された人が言つた二つのことが非常に面白かつたのです。一つはアイマスクをして何も見えないのに「光が見える」と言つたこと、もう一つは「人の姿が見える」と言つたことです。非常に驚いたのですが、「光が見える」とはつまり、夜空を飛ぶUFOです。人の姿は宇宙人とも言えるわけです。つまり何かが増減で側頭葉が刺激されて、宇宙人に遭つたという記憶が生まれる、ということが、僕がUFOを研究して導かれた一つの答えなのです。

もう一つ違う話ですが、今月初め、雑誌の取材でイギリスのコーン・ウィルソンという作家にインタビューをして来ました。もともと実存主義に近い人で、サルトルなどの影響を受けて「アウトサイダー」という本を五〇年代に出して一躍世界的に有名になつた、もう七十歳ぐらいの方ですが、最近、オカルトやポルターガイストなどに非常に興味を持っていて、日本で四月に「エイリアンの夜明け」という宇宙人の本を出したのです。それで宇宙人の本を出した理由を伺に行つたのです。

まず「本人が宇宙人や空飛ぶ円盤の存在を信じているか

開きたかったのですが、話を聞くと「宇宙人は空からはや
つて来ない」と言うのです。どこからやってくるのかとい
うと「この地球上にある別の世界からやって来る」と言っ
ているのです。

僕たちが普段生活して、目で見てあるいは手で触って、
五感で触れているのは四次元の世界なのですが、彼による
と、この世界は四次元ではなくて、五次元、六次元、七次
元という、目に見えない何かがあるところに同時にあるバラ
ルワールド（平行世界）であり、そこにエイリアンが住
み、天才あるいはある特種な能力を持った人たちが、五次元、
六次元、七次元の世界をかみ見ることでできる人たちが
「エイリアンに遭った」と言うのだそうです。

さらに話を聞いて行くと、今僕たちが暮らしている二十
世紀文明は、論理性をつかさどる左側の脳を使い切った産
物であって、左脳の可能性は十分出し尽くした、でも半分
の眠っている能力が右脳にある。その右脳を十分に使うこ
とによってエイリアンにも通えるといったことを言ってい
るのです。

例えばここに幽霊とかポルターガイストとかエイリアン
が見える人がいるとしたら、その人は七次元、八次元の世
界が見えているということなのです。たぶんそれは、ここ
に実在するかのようには脳の中に見えているのだと思うので
す。

それはまさに右脳の世界で宇宙を見たということ、エ
イリアンに遭ったと言う人はほとんどそれと同じ体験をし
ているのではないかと、つまり左脳と右脳が十分バランスよ
く働いていると言うのです。そう考えとくと、これから
人間がどう生きて行くかという時に、今まで左脳の能力は
十分使ってきたから人間はもう半分の眠っている
右脳の能力を使って行こうということをやっているとい
思っています。そう考えとくと、宇宙人に遭ったと言う人
も変わった人ではなくて、もしかしたら大事なメッセージ
を言っているのではないとも言える。なんかだんだんU
FOがおもしろいと思いはじめているところですよ。

ゴッホの絵に影がない理由

普通 人間は物を見る時に目で見ます。しかしゴッホの

絵を見ますと影がありません。初期の作品はともかくとし
て、ある程度自分のスタイルを確立して以降ですが、なぜ
でしょうか。これが実は脳と関係があります。

ゴッホは僕たちが目で見ることのできない何か違った世
界を、目以外の何かによって描いているのではないかと
いうことです。

ゴッホは日本の浮世絵に強力な影響を受けたのですが、
実は浮世絵にも影がないのです。浮世絵を見てピンと来て、
こういつたもの見方、絵の描き方があるのだとその本質
を見抜いたのだと思うのです。

日本で浮世絵を描いていた江戸時代はどういった時代だ
ったかというのですが、それを今から、若干解剖の
話と関係して進めさせていきたいと思います。僕は芸
大を出て、大学院の途中から東大の養老孟司先生のもとで
一緒に研究をさせていただいたのですが、ある解剖図があ
って、その中にハエが描かれています。それはなぜかとい
う研究テーマを与えられました。それで、脳についての本と
か、関係書をいろいろ読んでいたのですが、ある時ハツと
わかったのです。

普通何か絵を描く時に、僕たちはつい輪郭線を書いてし
まいますが、この絵の輪郭の部分には線がないのです。実
はこれがハエが止まっている舌なのです。まずそもそも輪
郭線とは何か、あるいは輪郭線を描かないで、影だけ描い
てものを見るとはどういうことでしょうか。

先ほどゴッホの絵に影がないと言いましたが、これ
はその正反対で、影だけで描いている絵なのです。光と影
しか書いてないの
です。これはまさに当
時の十七世紀のヨー
ロッパの絵の描き方
ですね。絵画の場合
も同じで、光と影だ
けを描けば世界が描
けるという考え方な
のです。

人間の目は非常に
不思議なもので、物



理的にはないものだけけれど、輪郭線が見えるようにできて
いるのです。脳の中に輪郭線があるわけですね。先ほどの
UFOや宇宙人もそれに近くて、実際にはないものがあるよ
うに見えてしまうというメカニズムが、人間の目あるいは
脳にあるわけですね。先ほどの解剖図は人間の持っている生
理的な働きをうまく利用しているわけですね。

ところで、江戸時代の本で、前野良直、杉田玄白で有名
な「解体新書」は、オランダのビドロという人が書いた
「ターヘル・アナトミア」という本を翻訳したものですが、
絵はオリジナルで描いたのではなくて、オランダのいくつ
かの解剖本をまねてそのままだけで、オランダの
ところが、まねてない部分があるのです。それは影で
す。影が描いてないのです。あと、オランダの本には解剖
台が描いてありますが、そうした背景が描かれていません。
更に大きな違いは、輪郭線しかないのです。解剖の器具も
輪郭線だけで描いているのです。

つまり、お手本にして描いている実体は同じなのですけ
ども、絵の描き方、もの見方として、まったく正反対な
のです。

これが言ってみれば、近代ヨーロッパのもの見方と、
日本の江戸時代のもの見方の大きな違いなのです。
美術においても同じです。フェルメールやレンブラント
といった時代の画家たちが描いた絵は、まさに光と影だけ
で描いている。それに対して江戸時代の浮世絵は輪郭だけ
で描いているのです。

ヨーロッパでは、十四世紀ごろには日本の江戸時代と同
じように、輪郭線だけをものを描いていました。それに対
してルネッサンス、近代というものが起こって来ると影を描
くようになった。足下の小石や草といった背景、風景も描
くようになるのです。ところが輪郭線を描いた絵には、回
りの風景もないし影もないということなのです。

この違いは何か。影を作っている元は太陽の光ですね。
太陽は東から出て西へ沈む。しかるに、影も動くわけです。
例えば絵を描く時、影をいかに追い回して、その度ごと
に描いていたら、影をいかに追い回して、その度ごと
で止めてしまふ。つまり、ある特定の瞬間を描くわけです。
影を描くということは、時間の世界でいえば、カメラでシ

「ヤッター」を押し、その瞬間の風景を描らえるように、ある瞬間の風景を描くのと同じなのです。

ある瞬間の風景を描くという事は、カメラと同じように、目に見えたものの全部を描いてしまおうということなのです。

で、先ほどのハエの話ですが、画家がわざわざ描いたハエというのは、絵を描く時間の中で、ある十秒ぐらいの間に見た風景、それをいかにして再現するかというふうにして描いたのが、そういう世界、瞬間的な世界です。まさに、自分は瞬間を描いているということを伝えるのに最高のモチーフであったわけです。

そこでゴッホです。人間のものの見方とはこれだけではないということを感じたのです。ゴッホはたぶん、瞬間的に世界を見てなかつたと思うのです。

瞬間的な世界を描く。これがまさにヨーロッパの絵の見方、あるいは描き方なわけです。十六、十七世紀のヨーロッパの画家たちが一番心を砕いたのは、光と影のパランスをどう描くか、あるいは動きの中の瞬間をどう描くかということだけだったわけです。そうした絵がどんどん進んで来て、印象派の画家とか出て来るのです。

印象派の画家として、モネとセザンヌ、ゴッホはよく一緒にされてしまっていますが、僕の見方、脳の見方からすれば、モネとセザンヌは百八十度正反対の画家です。どちらも筆のタッチで似ていますが、まったく違うと思うのです。モネは一言でいえば光を描いています。光のあるいは色彩の揺らめき、ほとんどそれだけを描いているのです。まさに目で見た世界です。それに対してセザンヌが描いているのは何かというと、固まりですね。つまり目で見るものではなく手で触れるもので、存在感の重みであるとか、そういうことを描いているわけです。

まとめてみますと、もの見方には二つの世界があると僕は考えています。一つは目で見た世界、それを僕は「目の視覚」と呼んでいるのですが、それに対してもう一つの「脳の視覚」というのがあるということです。

近代ヨーロッパ絵画では「目の視覚」で光や影やあるいは色彩を描いてきた。それに対して江戸時代あるいは

ゴッホ、セザンヌ以降の美術は、「脳の視覚」でものを重みとか、固さあるいは温度など、つまり目で見えぬ世界を描く方向に移ってきたという事です。西洋の美術は、ゴッホやセザンヌによって大革命されたわけですが、何によって革命が起こったかという点、江戸時代のものに見方だったのでないかということですね。

これは優劣の問題ではなくて、人間のものの見方には二つの世界がある。視覚の中でも比較的目的に近い見方と、脳に近い見方があるということですね。

先ほど影と申しましたが、ゴッホはもちろん影は見えてるわけですね。しかし影が見えるのと影を描くのはまた別の話なわけです。ゴッホにとって影を描くということは、言ってみれば目のリアリティを描くわけです。自分が感じた世界とは違う世界なので、敢えて影を描かないわけですね。

ゴッホは、太陽がどう動いても変わらないものを何と描こうとした。江戸時代の人たちもそうだと思います。いくら目を開いても見えてこなくて、脳の中で見えてくる世界を描こうとしたのではないのでしょうか。

これが僕的美術の見方なのです。皆さんも、ある絵を見たら時に、これは目の視覚なのだろうかと、脳の視覚なのだろうかと、この視点で見たいと思います。脳の奥深くに行けば行くほど、目の前の花の美しさではなく、その背後にある時間を超えた世界、瞬間に対して永遠の世界が見えてくるのだと思うのです。そういうふうに美術を見ていただければと思います。

【死体の話】

僕は十数年ぐらい解剖学教室でずっと死体の研究をしてきたのですが、そこで見た世界をちよつと紹介させていただきます。僕は芸大にいたころ、レオナルド・ダヴィンチの研究をしていました。彼は絵を描いただけでなく、解剖もしたんですね。彼は絵を描いただけでなく、解剖もしたんですね。彼は医学部に行つて本格的に解剖の勉強を始めたのです。

「解剖をしていて怖くないですか」とかよく聞かれるのですけども、今まで解剖をした中で一番怖かったのはいつかということ、初めて解剖をした時の晩ですね。いざ

現場に立つてメスを持つてしまつたら普通に始めてしまったのです。実際現物を見ないで想像するということがよつて生じている誤解というのは、死体に関しても非常に大きいんじゃないかと思えます。「死体」という言葉に象徴させて、本来自然の世界にあつたりリアルなものに対して、もしかしたら本来の正しい見方とは違つたかと思つて、ゆがんだ見方になってしまつていっているのではないかと私は思います。

今、臓器移植問題が非常に大きくクロウズアップされています。それを超える場合にも、人間にとつて「死」とは何かがわかつていないと、解決できません。

人の死について、僕たちは「〇〇さんは〇月〇日の〇時〇分に亡くなりました」というような言い方をします。でも人間の死には、実はそういう瞬間は一般にはありません。これは最近脳死とか臓器移植の問題でも知られるようになってきたのですが、脳が死んでも心臓は動いている。心臓が止まっても肝臓が動いている。肝臓が止まっても爪が伸びたりとか髪の毛が伸びたりする。つまり自然の死というのは、どこで完全に死んだのかはわかりませんが、何となく死が始まつたなあとというところから、最後に完全に死ぬまでの緩やかな一連の連続の過程なのですね。

以前、交通事故で死んだハクビシンという動物の死体を腐らせて、死の過程を観察したことがありました。

すると、何日目か見ると、死体が真っ白になって泡が湧いていました。よく見ると、ウジが身体全面を覆つてうごめいていたのです。

その時にハツと気がついたのでありますが、自分は死の世界を見ているつもりだった。しかしそこにあるのは死の世界ではなくて、生の世界だったのです。死と生は切り離せるものではないと初めて教えられたのです。

そういう意味で死と生というのは裏表一体の世界なのではないかと思うのです。

【文責：編集部】